

序

社会医療法人財団白十字会 理事長 富永 雅也



社会医療法人財団白十字会は、1929年、初代理事長富永猪佐雄が佐世保市宮崎町に診療所を開いて以来、長崎大学、福岡大学、佐賀大学や医師会の先生方を始め、関係各位のご指導とご援助をいただきながら、昭和・平成と80数年間を歩んでまいりました。

さて、2016年はさまざまな場面が心に残る年でした。4月には熊本県熊本地方を震源とする「熊本地震」が発生しました。「前震」「本震」と2度の大きな揺れに襲われ甚大な被害が出ました。被災地の大きく変化した姿、特に熊本城の倒壊寸前の櫓が石垣1本で必死に耐える姿は、今回の災害の象徴的光景でした。白十字会グループにおいても、直ちに被災地支援を行いました。

夏にはリオデジャネイロオリンピックが開催されました。日本選手団はさまざまな競技で大活躍し、史上最多のメダル41個を獲得しました。

メダル獲得には、オリンピック4連覇の伊調馨選手(女子レスリング)、2連覇の内村航平選手(男子体操個人総合)、と歓喜に沸くメダル獲得劇もあれば、オリンピック4連覇を目指した吉田沙保里選手(女子レスリング)のまさかの敗退もありました。銀メダル獲得でも「申し訳ありません」と国民に謝罪する吉田選手の姿に、涙した人も多かったことでしょう。

しかし、一番人々を熱くさせたのは、陸上男子400メートルリレーの銀メダル獲得ではなかったでしょうか。北京オリンピックでも銅メダルを獲得し、世界を驚かせていた日本チームですが、今回はそれを上回る結果を残し、まさに歴史的快挙と言えるものでした。

「体格・運動能力面で劣る日本人が、陸上競技でメダルを獲得できるのか？」この難題に対し、陸上日本選手団は30年ほど前からこの競技の強化に取り組み、日本人の正確さと連携力の高さを生かし、リレー時のスピードダウンを防ぐ「アンダーハンドパス」を採用することに勝機を見出しました。少しでもタイミングがずれると失格になるリスクを背負い、失敗と成功を繰り返しながら、一步ずつ世界との差を縮めてきました。

今回のオリンピックでの成功は、先人たちの努力のバトンが時代をこえて繋がり、実を結んだ結果だと言えるでしょう。また、この成功が財産として未来のアスリートに受け継がれ、さらなる良い結果をもたらすことが期待されます。

さて、白十字会グループにおいても80数年の歴史の中でさまざまな難題に挑んできた先輩方の努力があります。それは見えない財産として脈々と受け継がれています。この間に、白十字会グループは、急性期から在宅介護までのさまざまな医療・介護サービスを展開してまいりました。

これからの将来、医療・介護の大転換期を迎えるこの状況においても、対応できる準備ができていると自負しております。しっかりと今を見つめ、未来の人財へバトンを渡していけるよう、走り続ける所存です。

このたび、礎病院長のリーダーシップのもと関係各位の尽力により佐世保中央病院の2016年度病院年報が完成いたしました。ぜひお手に取って、この素晴らしきチームの中身を知って頂ければと思います。

いつも佐世保中央病院に賜りますご厚情に深く感謝、お礼を申し上げ、関係各位の今度共にご指導とご援助をお願い申し、序文といたします。

Annual Report 2016

発刊にあたって

佐世保中央病院長 碓 秀樹



Annual Report 2016 [病院年報]の発刊にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

日頃、佐世保中央病院の運営に関しまして、多大なるご協力をいただきまして心から感謝申し上げます。振り返ってみますと2016年度も、国内・海外でいろいろな出来事がありました。リオ五輪での日本選手団の大活躍、大隅良典氏のノーベル生理学・医学賞受賞など感動的なニュースも多い中、予期せぬ出来事も多数報道されました。特に衝撃的であったのは、4月の熊本地震です。その数か月後、熊本市内の救命救急センターの先生の講演で、当時の生々しい状況をお聞きしました。“地震など全く予想していなかった。自らの病院も被災し壮絶な中、冷静に臨機応変に対処できたのは、日頃いろいろなシミュレーションで訓練を行っていた賜物だと思う。日頃の準備が大切です。”とのお話でした。当院でもいろいろな状況を想定した大規模災害訓練を、危機感をもって今後も継続していきたいと考えています。

2016年7月、当院眼科がこれまでの非常勤体制から約10年ぶりに常勤体制となり、糖尿病センターの患者さんを中心に診療を開始しています。また同じく7月から脳血管内科が新設となり、脳神経外科と協力のもと脳梗塞に対する血管内治療など積極的に取り組んでいます。

病院統計として、病床稼働率(動態)84.8%は昨年より減、新規入院患者数は6,652人、平均在院日数14.4日、手術件数1,572件はほぼ前年度と同様の結果でした。紹介率89.0%、逆紹介率131.6%は、いずれも年々上昇傾向にあり、当院が最重要課題として取り組んでいます地域の先生方との連携強化の成果と考えます。

社会医療法人(2011年承認)の責務として救急医療は、救急外来患者数5,948人(うち救急車搬送数2,517台)と年々増加しており、多職種の協力のもと今後も地域の救急医療の一翼を責任をもって担っていききたいと考えています。

2025年に向けての地域医療構想により、医療機能の分化・連携、在宅医療等の充実が推進される中、佐世保中央病院が地域で担うべき役割をしっかりと認識し、今後も連携強化を最重要課題と位置づけ、全職員一つとなり、さらに質の高いそして安心とやさしい医療と看護を提供できるよう努力していききたいと考えています。

今後とも皆様のご指導とご支援を賜りますようどうぞよろしくお願い致します。

CONTENTS

序

刊行にあたって

1 病院概要

沿革	6
理念・方針	11
基本情報	14
病院の取り組み	18
地域医療支援病院	19
臨床研修指定病院	23
脳卒中センター	24
認知症疾患医療センター	24
長崎県指定がん診療連携推進病院	25
日本医療機能評価機構認定施設	25
メディカル・ネット99	26
PREMISs	27
ISO15189	28
社会貢献(CSR)活動	29
ふるさと企業大賞 受賞	30
ユマニチュート®(認知症への取り組み)	31
人間ドック機能評価優秀賞 受賞	32
地域連携懇談会開催	33
入退院支援センター	33
学会認定施設	34
施設基準	35
電子カルテ(HOMES)紹介	37
ボランティア活動	37
白十字会Institute	38

病院統計

診療実績	41
紹介率・逆紹介率	42
月別外来延患者数(1日平均)	42
月別入院延患者数(1日平均)	43
病床(動態)稼働率	43
平均在院日数	44
1日平均在院患者数(静態)	44
新規入院患者数(全体)	44

救急統計

救急外来受診者数と救急車搬入数	45
救急外来受診者の年齢分布	45
救急外来の診療科別内訳	46

救急車搬入時の診療科別内訳	46
---------------	----

診療情報統計

疾病大分類	47
疾病大分類(推移)	47
悪性新生物	48
悪性新生物上位15部位(推移)	48
退院患者(上位30疾患)	49
死亡退院患者率	50

臨床評価指標

褥瘡有病率・褥瘡推定発生率	51
入院患者の転倒・転落発生率	52
入院患者の転倒・転落による損傷発生率(レベル3以上)	52
輸血製剤廃棄率	53
術中・術後の大量輸血患者の割合	54
糖尿病の患者さんの血糖コントロールとHbA1c(HbA1c<7.0%の割合)	55
感謝状	56

満足度調査	57
-------	----

2 診療部

外来診療担当表	66
呼吸器内科	68
腎臓内科	70
神経内科	72
リウマチ・膠原病センター	74
糖尿病センター	77
消化器内視鏡センター	79
人工透析センター	81
循環器内科	83
外科	85
整形外科	88

脳神経外科・脳血管内科	90
心臓血管外科	94
皮膚科	96
小児科	98
泌尿器科	100
眼科	102
耳鼻咽喉科	104
放射線科	105
麻酔科	107
病理部	108
認知症疾患医療センター	110
歯科	115
健康増進センター	116
研修医の紹介	118
学会賞等受賞記念学術講演会	119
学会発表実績	120

3 各部

看護部	140
薬剤部	146
放射線技術部	148
臨床検査技術部	150
臨床工学部	152
リハビリテーション部	154
栄養管理部	156
感染制御部	158
医療安全管理部	160
臨床研究管理部(治験管理室)	162
事務部	
医療事務課	164
診療情報管理課	164
医局秘書課	166
資材課	167
総務室・財務室・人事管理室・広報室	169
地域医療連携センター	170
健康管理部(健康増進センター)	173

4 委員会

委員会組織図	176
--------	-----

活動報告

病院機能向上推進室会議	177
倫理委員会	177
医療安全管理対策委員会	178
栄養管理委員会	178
薬事委員会	179
クリニカルパス委員会	179
広報委員会	180

5 巻末資料

院内行事	182
新規医療機器紹介	183
患者会・家族会活動実績	184
資格取得奨励支援制度	188
提案制度	188
新聞記事などの紹介	189
学会発表実績	190